

# 山奈宗真著『岩手沿岸古地名考』の 書誌学的検討と内容分析

谷端 郷\*・村中亮夫\*\*・塚本章宏\*\*\*・花岡和聖\*・磯田 弦\*\*\*\*

- I. はじめに
- II. 『岩手沿岸古地名考』の書誌学的検討
  - (1) 山奈宗真による被災地調査の概要
  - (2) 遠野博物館本と国会図書館本にみる表記の特徴
- III. 『岩手沿岸古地名考』の内容
  - (1) 序文
  - (2) 津波地名の分布、空間スケール、由来
  - (3) 山奈による津波地名の成立に関する考証
- IV. おわりに

## I. はじめに

本稿では、40件の津波に由来する地名（津波地名<sup>1)</sup>）を集成した『岩手沿岸古地名考』に着目し、その書誌学的検討と内容分析とを通して、本書の資料的価値を検討することを目的とする。『岩手沿岸古地名考』は、1896（明治29）年の明治三陸地震津波発生直後に三陸沿岸の被災地を調査した山奈宗真によって著された。なお、本書には遠野市立博物館所蔵の『岩手縣沿岸地名考』と国立国会図書館所蔵の『岩手沿岸古地名考 全』（「岩」は原本では旧字体「巖」である）の2種類が存在する。本稿では、両資料を『岩手沿岸古地名考』と総称するとともに、各館の資料をそれぞれ「国会図書館本」、「遠野博物館本」と呼ぶ。

山奈宗真（1847～1909）は、盛岡藩士の子

として陸奥国閉伊郡横田村（現、岩手県遠野市）に生まれ、遠野町農業試験所や遠野製紙場を設立するなど、遠野地域において勸農家、勸業家として活躍した人物である。1896（明治29）年6月に三陸地方を大規模な地震津波が襲い、これにより2万2千人にも及ぶ死者が出るなど、三陸沿岸の各町村は甚大な被害を受けた。この災害の発生から約1ヶ月後に、山奈は三陸沿岸の被災地に入り、被災の状況を細かに調査した功績で知られる<sup>2)</sup>。山奈の著書や関連資料は多岐にわたり、国立国会図書館や遠野市立博物館などに所蔵されている。これらのうち、明治三陸地震津波調査関連のものでは、山奈自身が帝国図書館（現、国立国会図書館）に寄贈した複数の資料が知られている。他方、遠野市立博物館所蔵の資料群は、山奈の遺族によって寄贈されたものである。

帝国図書館に寄贈された資料は全部で7点である（表1）<sup>3)</sup>。帝国図書館を寄贈先としたのは、自身の調査報告が岩手県では尊重されず、資料の散逸が懸念されたためという見方が強い<sup>4)</sup>。これらの資料を検討した北原<sup>5)</sup>は、山奈の調査意図は、「被害数値には現れない沿岸漁村の現状と今後の漁村挽回、すなわち復興の仕法を見出すこと」を念頭に置いたものであったと評価している。7点のうち表1のNo.7を除く6点が明治三陸地震津波調査関連であり、No.1～5の資料5点が町村別や

キーワード：山奈宗真、津波地名、書誌学、三陸地方、『岩手沿岸古地名考』

表1 国立国会図書館が所蔵する山奈資料の一覧

| No. | 資料名                 | 概要                              |
|-----|---------------------|---------------------------------|
| 1   | 『三陸大海嘯岩手県沿岸見聞誌一斑 完』 | 町村ごとに被害概要を整理したダイジェスト版           |
| 2   | 『岩手県沿岸大海嘯取調書 甲乙丙丁』  | 集落ごとに集落や生業に関わる基礎的な情報を列挙。調査報告の根幹 |
| 3   | 『岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図 完』  | 集落ごとに地図を用いて被害数値や津波遡上高などを記載      |
| 4   | 『大海嘯各村別見取絵図』        | 町村ごとに被害概要をまとめようとしたもの。未完         |
| 5   | 『三陸大海嘯岩手県沿岸被害取調表』   | 集落ごとに被害戸数などを記載した被害数値表           |
| 6   | 『岩手沿岸古地名考 全』        | 地名に特化した、テーマ性の強いもの               |
| 7   | 『旧南部領岩手県地価沿革誌 全』    | 地租改正後の租税に関する記録。明治三陸地震津波とは直接関係ない |

出典：北原系子『津波災害と近代日本』吉川弘文館，2014，48-98頁をもとに作成。資料名の表記も同書による。

集落別にまとめられた被災地調査報告である。このうちNo.1, No.3～5は被災範囲や被害数値を主に図や表で示した資料，No.2は復興の手掛かりを求めて収集された集落や生業に関わる基礎的な情報を列挙した資料である。これらに対してNo.6の『岩手沿岸古地名考』は明治三陸地震津波調査の際に山奈が知ることとなった津波地名の記録集であり，津波地名に特化したテーマ性の強い資料である。北原<sup>6)</sup>も指摘するように，この意味で本稿で取り上げる『岩手沿岸古地名考』は，山奈の被災地調査資料の中でも異質なものとして位置付けられる。

山奈の被災地調査資料を活用した先行研究は，昭和初期に地震学者の武者<sup>7)</sup>による資料紹介が最も早い例とされている<sup>8)</sup>。その後の具体的な研究展開は，①明治三陸地震津波の復原と，②山奈の調査自体の検証とに大別される。①明治三陸地震津波の復原では，山奈の資料は1980年代頃に研究利用されはじめ，被害数値の検討<sup>9)</sup>や資料の翻刻<sup>10)</sup>，津波遡上高の復原<sup>11)</sup>，被害と地形との関係の分析<sup>12)</sup>など，明治三陸地震津波の実態解明のための記録として用いられてきた。また，中央防災会議<sup>13)</sup>による明治三陸地震津波の総合的検証においても，山奈の調査した津波遡上高の記録が取り上げられた。

他方，②山奈による被災地調査自体の検証では，山奈が残した被災地調査資料が詳細に検討されてきた。たとえば，山奈の調査行程

を復原したり<sup>14)</sup>，山奈の調査が単純な被災地調査のみならず，復興をも意図していたのではないかという点が議論されたりした<sup>15)</sup>。さらに近年では，山奈の明治三陸地震津波に関する記録だけでなく，その調査の過程で収集された明治以前の歴史津波の伝承類を検討するという，新たな研究の方向性も示されるようになってきた<sup>16)</sup>。

本稿で扱う『岩手沿岸古地名考』は，二つの観点から学術的な有用性を有している。すなわち，一つ目は明治三陸地震津波発生後に実施された山奈による調査成果の全体像を理解する際の有用性である。本書については，これまで上述の研究史のなかでほとんど扱われることがなかった。これは本書が明治三陸地震津波による被害状況を直接示すものではなく，あくまでも調査成果の副産物としてみなされてきたことに因るものと思われる。しかし本書について北原<sup>17)</sup>が，「山奈の関心事の広がり把握することができる資料」，「山奈の仕事全体を考察する上では重要な意味を持つもの」と評するように，本書自体は明治三陸地震津波の客観的な被害状況を示す資料ではないものの，山奈の調査全体を適切に評価していくためには，同じタイミングで収集された情報にもとづく本書も欠かせない資料のひとつだと考えられる。

二つ目は，三陸沿岸の住民と津波災害との関係性を歴史地理学的に考える際の資料として有用な点である。津波地名は，津波の被災

経験を後世に伝える媒体<sup>18)</sup>としての側面を持つ。そのため2011(平成23)年東日本大震災以降、津波地名の由来の整理・分類<sup>19)</sup>や、由来の信憑性を検証する試み<sup>20)</sup>など、津波地名の特徴や役割を把握するための基礎研究が進められるようになってきた。

これらの諸研究に加えて、津波地名を拠り所として三陸沿岸住民と津波災害との関係を検討することは、津波常襲地域である三陸沿岸の住民が独自に育んできた津波災害に対する知恵、すなわち災害文化を探ることにもつながる。災害文化には津波地名以外にも様々な要素があるが、本書には明治時代の三陸沿岸住民によって認識されていたと考えられる津波地名が記録されている。このことから、本書をもとに当時から現在に至るまでの間、三陸沿岸住民が津波地名をどのように継承してきたのか、住民と津波災害との関係を歴史地理学的に検討することができる有用な資料ともなり得る。

## Ⅱ.『岩手沿岸古地名考』の書誌学的検討

### (1) 山奈宗真による被災地調査の概要

山奈による明治三陸地震津波後の被災地調査の行程は、山奈の著した「日誌」<sup>21)</sup>に詳しい。「日誌」とは、『岩手県海岸巡回古文書拾集録』<sup>22)</sup>(遠野市立博物館蔵)に収録された鉛筆書きの一篇である。「日誌」は、津波発生から約1ヶ月後の1896(明治29)年7月25日に書き起こされ、天気や調査した集落、面会人、宿泊地などが記載されている。山奈が「日誌」を書き始めた25日は、岩手県に建議していた被災地調査が許可された日にあたる。関連資料が残っていないため建議の詳細は不明だが、北原<sup>23)</sup>によると、この日以前に山奈は三陸沿岸の復興の手掛かりを求めるための調査の必要性を岩手県に建議していたと考えられている。山奈の意を受けて、岩手県は調査を許可し、同月27日に「海嘯被害地授産方法取調トシテ沿岸各郡巡回ヲ嘱托ス」

との辞令を交付した<sup>24)</sup>。ところで、25日の「日誌」には、自身の建議が認められなかった場合には、独自に調査を実施する予定であった旨も記されており、山奈の被災地調査への覚悟が感じ取れる。

翌26日は県庁などで三陸沿岸の地図を写し取ったり、水路局(現、海上保安庁海洋情報部)作成の地図を取り寄せたりするなど調査の準備に費やした。そして、27日には県庁にて県知事と面会し、県から被災地調査を委嘱された。その際、県の担当者と調査項目について調整を行うとともに、24円95銭の旅費の支給を県から受けた。調査項目については、『三陸海嘯被害地調査目』(遠野市立博物館蔵)で確認することができる<sup>25)</sup>。その内訳は「漁村ノ新位置」に始まり、「住家」、「漁民風俗」、「漁村制」、「凶荒調査」、「漁民需要品」、「海湾」、「海事考」、「漁村挽回」と多岐にわたる。『岩手沿岸古地名考』に通じる調査項目としては、「海事考」の下位項目にある「津波の歴史」が挙げられる。

山奈の三陸沿岸の調査行程は、以下の通りである。調査は、7月28日に県庁所在地の盛岡市を発ち、花巻町(現、岩手県花巻市)や実家のある遠野町(現、岩手県遠野市)を経由して30日に三陸沿岸の盛町(現、岩手県大船渡市)に出たところから始まる。その後、高田町(現、岩手県陸前高田市)に南下した後は北上に転じ、9月9日に県境を越えて青森県三戸郡八戸町(現、八戸市)まで進んだ。したがって調査期間は44日間に及んだことになる。八戸町到着の翌10日には、山奈は岩手県庁へ出向き、調査完了の報告を行った。主な宿泊地は、盛町、大槌町、山田町、宮古町(現、岩手県宮古市)、久慈町(現、岩手県久慈市)などの三陸沿岸の主要な町で、これらの各所では滞在期間が複数日とられた(図1)。

「日誌」によると、移動手段は、盛岡～花巻間と八戸～盛岡間では汽車を利用したほか、時には馬や舟も用いた。道中では大嵐に

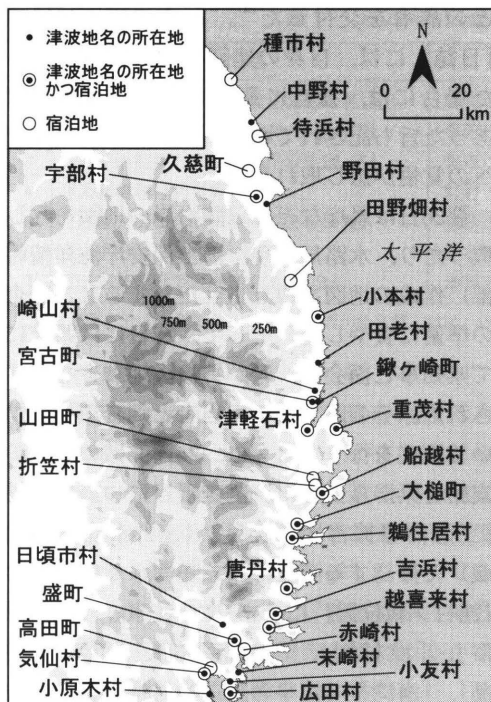


図1 『岩手沿岸古地名考』にみられる  
津波地名の所在地

注1：津波地名の所在地および宿泊地の位置精度は旧町村レベルである。各点の位置は旧町村役場の位置であり、大正初期に発行された5万分の1地形図から抜き出した。ただし、小原木村は基図とした地形図の刊行当時すでに南隣の唐桑村と合併しており、もとの村役場の位置を特定できなかったため、岩手県に最も近い大沢集落の中心を代表点とした。

注2：宿泊地の情報は、『日誌』を翻刻した以下の文献から得た。多面木貞夫編著『遠野の生んだ先覚者山奈宗真』遠野市教育文化振興財団、1986、137～146頁。なお、44日に及ぶ調査期間の内、7日分の宿泊地を特定できなかった。

よる渡船の欠航や河川の洪水による足止めなど、障害にも見舞われたという。また、途中案内人を雇うこともあった。宿泊先は、旅館のほか、病院、役場、個人宅であった。山奈が面会した人々は、郡長や町村長などの地方行政の要職にある人物や、「多田、田口、指野三名北方ヨリ被害地調査シ来リ」（『日誌』より）の記述にみられる三陸沿岸の北部から南下してきた津波関連の調査者3名、地域の有力者などであった。それぞれの滞在地で

は、その周辺の被災地を踏査したほか、主に地図や古文書の写しを行った。このように「日誌」をみていくと、被災直後という制約条件の中、山奈の調査が、現地踏査を基本に、地元有力者への聞き取りや古文書の閲覧など、手堅い方法によって進められたことが読み取れる。

## (2) 遠野博物館本と国会図書館本にみる表記の特徴

ところで、本稿の冒頭でも述べたように、『岩手沿岸古地名考』は、現在、遠野市立博物館と国立国会図書館に所蔵されている。遠野博物館本と国会図書館本とを比べてみると、前者のタイトルが『岩手県沿岸地名考』であるのに対して、後者は『岩手沿岸古地名考全』とタイトルに差異が認められる（図2）。また、遠野博物館本には朱色で修正が施され、基本的にはその修正が国会図書館本に反映されていると考えてよい。ただし、国会図書館本では送り仮名を揃えるなど、遠野博物館本で修正を加えた箇所以外にも文章表現の微細な変更箇所が多々認められる<sup>26)</sup>。このことから、遠野博物館本は国会図書館本の稿本として位置付けられる。

両者の本文を原本通りの表記で翻刻したものを表2に示す。なお、本稿で本文中にこれを引用する際には、旧字体を新字体に改めている（表3も同様である）。それらをもとに両者の内容の違いに目を向けると、大きく四つの相違点を指摘できる。その第一点目とは、遠野博物館本の表記が漢字カナ交じり文であるのに対して、国会図書館本では漢字かな交じり文となっている点である。これは、識字率が低かった明治時代において、公的文書で利用されていた漢字カナ交じり文ではなく、より分かりやすい漢字かな交じり文で執筆することで、できるだけ多くの人々に読まれることを意識したためではないかと思われる。第二点目として、国会図書館本において





図2 国会図書館本(上)と遠野博物館本(下)

注：各本の右側が表紙、左側が本文の一部。

出典：国会図書館本は国立国会図書館デジタルコレクションから転載、遠野博物館本は筆者が撮影。

津波地名の所在する国名や村名が修正されている点を指摘したい。いずれの箇所も正しく修正されており、国会図書館本の作成にあたって慎重に情報の確認作業を行ったことが窺いしれる。

第三点目は、40件の津波地名のうち半数にあたる20件の読みが変更されているという事実である。たとえば、遠野博物館本では「ヲ

マキフツ」とあるが、国会図書館本では「ヲマキフチ」へと変更された。このように、遠野博物館本では現地の方言で読みを記載していたものを、国会図書館本では標準語に改めたと思われるケースが散見される。最後に、文末表現が修正されている点に注目したい。たとえば、「ならやの如し」を「なるか」に変えて推量のニュアンスを変えたり、「という」

表2 『岩手沿岸古地名考』の本文・注

| No. | 国会図書館本  | 遠野博物館本  |
|-----|---|---|
| 1   | <p><b>鯨ヶ渚</b>（サメカフチ）岩手縣は宮城縣の境陸前國本吉郡小原木村の山谷に在る此地鯨ヶ渚と稱し小原木村海濱より凡壹里拾丁許の山奥の澤に在り往古大海嘯の際激浪のため鯨魚うち上げられ居りたるより名稱せしむといふ</p> <p>按するに弘仁十一年或は貞觀十年の大海嘯の當時ならんか</p>   | <p><b>鯨ヶ渚</b>（サメカフツ）岩手縣ハ宮城縣ノ境陸前國本吉郡小原木村ノ山谷ニ在ル此地鯨ヶ渚ト稱シ小原木村海濱ヨリ凡壹里拾丁斗リノ山奥ノ澤ニ在リ往古大海嘯ノ際激浪ノタメ鯨魚打揚ケラレ居リタルヨリ名稱セシト云</p> <p>考ルニ弘仁十一年或ハ貞觀十一年ノ大海嘯ノ當時ナランヤ</p>   |
| 2   | <p><b>朽舟</b>（クチフネ）陸前國氣仙郡氣仙村字長部港の山澤に在り此地海岸より凡壹里半往古大海嘯の當時山上の谷合に漁船激浪に打上られ海面に下る能はず故に船自然に朽れたるより朽舟と名稱せしと云ふ</p> <p>考ふるに慶長十六年十月廿八日大海嘯の際ならんか</p>   | <p><b>朽舟</b>（クツフネ）陸前國氣仙郡氣仙村字長部港之山沢ニ在リ此地海岸ヨリ凡壹里半往古大海嘯ノ當時山上ノ谷合ニ船激浪ニ打上ケラレ海面ニ下ル能ハス故ニ舟自然ニ朽レタルヨリ朽舟ト名稱セシト云</p> <p>考ルニ慶長十六年十月二十八日大海嘯ノ際ナランヤ</p>  |
| 3   | <p><b>鍋在リ</b>（ナベアリ）陸前國氣仙郡氣仙村字長部港の奥山字朽舟のみに鍋在りと名稱せし地名在り往古大海嘯の際鍋激浪に打上けられあるより名稱せしなり</p> <p>考ふるに慶長十六年十月廿八日海嘯の當時ならん</p>   | <p><b>鍋在リ</b>（ナベアリ）陸前國氣仙郡氣仙村字長部港ノ奥山字朽舟ノ入ニ鍋在リト名稱セシ地名在リ往古大海嘯ノ際鍋激浪ニ打上ケラレアルヨリ名稱セシナリ</p> <p>考ルニ慶長十六年十月二十八日海嘯ノ當時ナラン</p>   |
| 4   | <p><b>舟荒</b>（フナアラシ）陸前國氣仙郡小友村字矢の浦に舟荒と唱る地名在り往古海嘯の際激浪に打上けられ船の破壊せしより名稱せしと云ふ</p> <p>考ふるに慶長十六年十月廿八日の海嘯或は明和年間海嘯ならむ</p>   | <p><b>舟荒</b>（フナアラシ）陸前國氣仙郡小友村字矢ノ浦ニ舟荒シト唱ル地名アリ往古海嘯ノ際激浪ニ打上ケラレ破壊セシヨリ名稱セシト云</p> <p>考ルニ慶長十六年十月廿八日ノ海嘯或ハ明和年間ノ海嘯ナラン</p>   |
| 5   | <p><b>駒込メ</b>（コマコメ）陸前國氣仙郡廣田村字長河の内に在りむかし海嘯の當時駒激浪に打あけられ助りたるより駒込めと名稱す昨明治廿九年六月十五日午後八時の大海嘯にも牡馬登頭激浪に押上られ本村蒲生辰之助取押へ助けたりといふ</p> <p>考ふるに寛永五年正月七日の海嘯ならむ如何となれば慶長年間の際地帳に右の地名見得す</p>   | <p><b>駒込メ</b>（コマコメ）陸前國氣仙郡廣田村字長河ノ内ニ在リ昔海嘯ノ當時駒激浪ニ打上ラレ助リタルヨリ駒込メト名稱ス昨明治廿九年六月十五日午後八時ノ大海嘯ニモ牡馬登頭逆浪押上ケラレ本村蒲生辰之助取押へ助けタリト云</p> <p>考ルニ寛永五年正月七日ノ海嘯ナランヤ如何トナレハ慶長年間ノ地帳帳ニ右ノ地名見得ス</p>   |
| 6   | <p><b>集リ</b>（アツマリ）陸前國氣仙郡廣田村字集りは往古大漁ありしとき漁民集合大漁の祝宴中海嘯あり此地地形海面より高き所は五拾尺低き所は五尺年号不詳と雖も五月五日の内此所に集りたる漁民のみ命を失はすと云ふ故に集りと地名を唱へ今に至る迄毎年五月五日は字集近傍漁民記念祝儀をなすといふ</p> <p>考ふるに凡そ四百年前明和七年の海嘯當時乎慶長年間伊達家の地帳の際帳簿の字に集りと云ふあり明治廿九年六月十五日海嘯にも十一戸の内十戸流亡人口八十六人中死亡六十人其内二人高さ五十尺の所へ打上けられたり</p> | <p><b>集リ</b>（アツマリ）陸前國氣仙郡廣田村字集リハ往古大漁アリシ時漁民集合大漁ノ祝宴中海嘯在リ此地地形海面ヨリ高キ所ハ五拾尺低キ所ハ五尺年号不詳ト雖モ五月五日之内此所ニ集リタル漁民ノミ命ヲ失ハスト云故ニ集リト地名ヲ唱ヘ今ニ至ルマデ毎年五月五日ハ字集リ近傍漁民紀年祝儀ヨナシナリ</p> <p>考ルニ凡ソ四百年前明和七年ノ海嘯ノ當時ナラヤ慶長年間伊達家の地帳ノ際ノ帳簿ノ字ニ集リト云アリ明治廿九年六月十五日海嘯ニモ十一戸ノ内拾戸流亡人口八十六人中六十人死亡中二人五十尺ノ高キ所ヘ□□タル□打上ラレ□□□□タリト云</p> |
| 7   | <p><b>岩鞍</b>（イハクラ）陸前國氣仙郡廣田村字堂の前近傍に岩倉といふ地名あり是もむかし海嘯の當時馬の荷鞍岩上に押上けられあるより是をみて岩倉と名稱せしと云ふ今に岩倉と書したる地名あり</p> <p>考ふるに前全断</p>   | <p><b>岩鞍</b>（イワクラ）陸前國氣仙郡廣田村字堂ノ前近傍ニ岩倉ト云地名在リ是レモ昔海嘯ノ當時馬の荷鞍岩上ニ押上ケラレアルヨリ之レ見テ岩鞍ト名稱セシト云今ニ岩倉ト書シタル地名アリ</p> <p>考ルニ前全断</p>   |
| 8   | <p><b>淡染</b> 陸前國氣仙郡廣田大字大野の内にあり是は大陽と大野との両方よりむかし海嘯に砂石押上げ森と成りたるより名稱せしといふ</p> <p>考ふるに本村大陽と大野は表裏の海濱なり當時海嘯尤激烈なるやの如し</p>   | <p><b>淡染</b> 陸前國氣仙郡廣田村字大野ノ内ニ在リ之レハ大陽ト大野トノ両方ヨリ昔海嘯ニ砂石押上ケ盛ト成リタルヨリ名稱セシト云</p> <p>考ルニ本村大陽ト大野ハ表裏ノ海濱ナリ當時海嘯尤大ナルヤノ如シ</p>   |
| 9   | <p><b>鯨田</b>（サメタ）陸前國氣仙郡末崎村に字鯨田といふ地名あり明治廿九年を去る凡七百年前大海嘯の當時鯨魚田浦に逆浪のため押上けられたるより名稱せしといふ</p> <p>考ふるに文治元年七月大地震山崩れ河川埋む海面傾ふく陸をひたせりと云ふことあり此地ならんか八十年前まで鯨魚骨あり識者は此海岸に近來生育せざる大魚の骨と云ふ方今尋るに之なき故に七百年前の海嘯ならんか</p>   | <p><b>鯨田</b>（サメタ）陸前國氣仙郡末崎村ニ字鯨田ト云地名在リ明治廿九年ヲ去ル凡七百年前大海嘯ノ當時鯨魚田浦ニ逆浪の爲メ押上ケラレタルヨリ名稱セシト云</p> <p>考ルニ文治元年七月大地震山崩レ河川埋ム海面かたぶく陸をひたセリト云事在リ當地ナラヤ八十年前マデ鯨魚骨アリ識者云ニ此海岸近來生育セサル大鯨ノ骨ノ内方今尋ル無シ故七百年前海嘯ナランヤト云</p>   |
| 10  | <p><b>舟折ヶ崎</b>（フネヲレカサキ）陸前國氣仙郡盛町と全部日頃市村の界に舟折れか崎といふ地名あり往古海嘯に舟激浪に押上けられ岩に觸れて舟の折れたるより名稱せし地名といふ</p> <p>考ふるに明應七年の海嘯なるかごとし</p>  | <p><b>舟折ヶ崎</b>（フネヲリケサキ）陸前國氣仙郡盛町ト全部日頃市村ノ界ニ舟折レカ崎ト云地名在リ往古海嘯ニ舟激浪ニ押上ケラレ岩上ノ爲舟折レタルヨリ名稱セシ地名ト云</p> <p>考ルニ明應七年ノ海嘯ナランヤノ如シ</p>  |
| 11  | <p><b>舟野</b>（フネノ）陸前國氣仙郡日頃市村字舟野といふ地名在り昔海嘯の當時激浪のため船数艘打上けられたるより名稱せしならん</p> <p>考ふるに前全断</p>  | <p><b>舟野</b>（フネノ）陸前國氣仙郡日頃市村字舟野ト云地名在リ昔海嘯ノ當時激浪の爲メ舟数艘打上ラレタルヨリ名稱セシナラン</p> <p>考前全断</p>   |

表2 『岩手沿岸古地名考』の本文・注(続き)

| No. | 国会図書館本   | 遠野博物館本   |
|-----|--|--|
| 12  | <p><b>鉾臺</b>(クワンタイ) 陸前国氣仙郡唐丹村より同郡古濱村に越る嶮阻なる峠あり大小二山なり一を大鉾臺と云ふ大むかし海嘯の當時鉾臺打上けられ在の人民皆流亡巡視の者此地の名稱をしる能はず故に流れある品鉾臺のみ故名称せしと云ふ考ふるに天平勝寶或は貞觀十一年の頃海嘯ならんか</p>   | <p><b>鉾臺</b>(クワンタイ) 陸前国氣仙郡唐丹村より全部綾里村越る嶮阻ナル峠アリ大小二山ナリ一ヲ大鉾臺ニ云小鉾臺ト云大昔大海嘯ノ當時鉾臺打上ラレ在ルノミ人民皆流亡来ル者此地ノ名称知ル能ハス故ニ流アル品鉾臺ノミ故名称セシト云<br/>考ルニ天平勝寶或ハ貞觀十一年ノ頃ノ海嘯ナランヤ</p>   |
| 13  | <p><b>舟上場</b>(フナアケバ) 陸前国氣仙郡越喜来村字甫嶺乃山上に在り舟上場は海岸より壹里餘の所なり往古大海嘯に逆浪の爲め舟押上げられたる故に名稱せしと云ふ<br/>考ふるに弘仁貞觀両度の海嘯の當時なるか</p>  | <p><b>舟上場</b>(フナアケバ) 陸前国氣仙郡越喜来村字口嶺ノ山上ニ在リ舟上場ハ海岸ヨリ壹里余ノ所ナリ往古大海嘯ニ逆浪の爲メ舟押上ケラレタル故ニ名称セシト云<br/>考ルニ弘仁貞觀両度海嘯ノ當時ナラヤ</p>   |
| 14  | <p><b>大舟ヶ崎</b>(オフネカサキ) 陸前国氣仙郡越喜来村に字大舟ヶ崎と云ふ所あり海岸より三拾丁餘奥の山上に在り往古海嘯の當時錯を引て大舟を山上に打上けられたる所なり<br/>考ふるに明應七年海嘯なるか</p>  | <p><b>大舟ヶ崎</b>(ヲフナカサキ) 陸前国氣仙郡越喜来村ニ字大舟ヶ崎ト云所アリ海岸ヨリ三十丁余奥ノ山上ニアリ往古之海嘯ノ當時錯ヲ引テ大舟口山上ニ打上ケラレタル所ナリ<br/>考ルニ明應七年海嘯ナラヤノ如シ</p>  |
| 15  | <p><b>大舟澤</b>(オフネサハ) 陸前国氣仙郡越喜来村字崎濱より字洞に越へトロハイ峠の澤に在り往古大海嘯の節船の激浪のため打上けられたる所故に名稱せしなり海岸より凡壹里餘當時の海嘯は激浪崎濱より字洞を越えたりといふ<br/>考ふるに貞觀十一年の海嘯なるやの如し</p>   | <p><b>大舟澤</b>(ヲフナサワ) 陸前国氣仙郡越喜来村字崎濱ヨリ字洞ニ越ヘトロハイ峠ノ沢ニ在リ往古大海嘯ノ節舟ノ激浪ノ爲打上ラレタル所故ニ名称セシナリ海岸ヨリ凡壹里余當時ノ海嘯ハ崎濱ヨリ字洞ヲ激浪越タリト云<br/>考ルニ貞觀十一年ノ海嘯ナラヤノ如シ</p>  |
| 16  | <p><b>牛轉</b>(ウシコロビ) 陸前国氣仙郡唐丹村字荒川濱の北に當り牛轉比と云ふ地名あり昔海嘯の際激浪に打れ牛の落ちたる所なり故に名稱す<br/>考ふるに慶長十六年の海嘯ならん荒川濱は慶長四年迄は戸數百二十戸余の町にして町の内中の町と云ふ所在り方今は謹々十三四戸のみ故に慶長十六年海嘯に流亡せしものゝことし</p>  | <p><b>牛コロビ</b>(ウシコロビ) 陸前国氣仙郡唐丹村字荒川濱ノ北ニ當リ牛コロビト云地名アリ昔の海嘯ノ際激浪打タレ牛落セシ所ナリ故ニ名称シ<br/>考ルニ慶長十六年ノ海嘯ナラン荒川濱ハ慶長四年マテハ戸數百廿戸余ノ町ニシテ町ノ内中の町ト云アリ方今ハ僅々十三四戸ノミ故ニ慶長十六年海嘯流亡セシモノナラフ</p>                                      |
| 17  | <p><b>蛸カラカイ</b>(タコカラカイ) 陸中国上閉伊郡鶴住居村に蛸カラカイといふ地名あり是も昔海嘯の際逆浪に蛸カラカイ打上けられたるより名稱せし場所と云ふ<br/>考ふるに近くは慶長十六年若くは明應七年の海嘯の際なるへし慶長後明應前後数回の海嘯あれとも東北地方記録に乏しきより充分考ふる能はず</p>   | <p><b>蛸カラカイ</b>(タコカラカイ) 陸前国上閉伊郡鶴住居村ニ蛸カラカイト云地名アリ是モ昔海嘯ノ際ノ逆浪ニ蛸カラカイ打上ケラレタルヨリ名称セシ場所ト云<br/>考ルニ近クハ慶長十六年遠クハ明應七年の海嘯ノ際ナルヘシ慶長後明應前後数回ノ海嘯アレトモ東北地方古記録ニ乏クヨリ充分考スル能ハス</p>   |
| 18  | <p><b>ホヤ拾ひ長根</b>(ホヤヒロヒナカネ) 陸中国上閉伊郡鶴住居村字白濱より大飯宿へる山坂にホヤ拾ひ長根と云ふ在り往古津浪に打上けられたる所なり故に名稱せしなりと云ふ<br/>考ふるにホヤ拾ひ長根は海面より数百尺も高き地形なり故に慶長十六年の海嘯よりも激浪高きか如し然れば明応七年ならん</p>   | <p><b>ホヤ拾ひ長根</b>(ホヤヒルヘナカネ) 陸中国上閉伊郡鶴住居村字白濱ヨリ大飯宿ニ越ル山坂ニホヤ拾ヘ長根ト云在リ往古津浪ニ打上ラレタル所故ニ名称セシナリト云<br/>考ルニホヤ拾長根ハ海面ヨリ数百尺モ高キ地形故ニ慶長十六年ノ海嘯ヨリ激浪高キヤノ如シ然ラハ明應七年ナラン</p>   |
| 19  | <p><b>樋</b>(ツツ) 陸中国上閉伊郡大槌小槌の地名在るに往古大海嘯に海濱の民屋人口悉く流亡残民来り視察するに地形陥落字地名知るに由なく樋の激浪に打上けられ在るのみなり故に樋と名稱せしといふ大小樋を分界せしは慶長以来南部の領する所となり制度の整頓より分區せしものなり大小樋元は樋村と唱へたりと云ふ<br/>考ふるに貞觀十一年の海嘯なるやの如し又大小樋区分して文字を木へんと金へんに区分したるは後世学者の策なり</p> | <p><b>樋</b>(ツツ) 陸中国上閉伊郡大小槌ノ地名在ルハ往古大海嘯ニ海濱民屋人口不残流亡残民来リ視察スル地形陥落字地名知ルニ由無ク樋ノ激浪ニ打上ラレアルノミ故樋ト名称セシト云大小槌ヲ分界セシハ慶長以来南部ノ領スル所トナリ制度整頓ヨリ分區セシ大小樋元ハ樋村ト唱ヘタルト云<br/>考ル貞觀十一年ノ海嘯ナルヤノ如シ又タ大小樋ノ区分シテ木ヘン金ヘン區分ケシタルハ後世学者策ナラン</p> |
| 20  | <p><b>三枚戸</b>(サンマイド) 陸中国上閉伊郡大槌町に在りむかし海嘯に戸三枚流亡ありしより名稱せしと云ふ<br/>考ふるに前全断</p>  | <p><b>三枚戸</b>(サンマエド) 陸中国上閉伊郡大槌町ニ在リ昔海嘯ニ戸三枚流亡アリシヨリ名称セシト云<br/>考ルニ前全断</p>  |
| 21  | <p><b>白澤</b>(ウスサハ) 陸中国上閉伊郡大槌町字白澤往古海嘯に白激浪に打上られあるより名稱せしと云ふ</p>   | <p><b>白澤</b>(ウシサワ) 陸中国上閉伊郡大槌町字白澤往古海嘯ニ白激浪ニ打上ラレ在ルヨリ名称セシト云<br/>考ニ海嘯事実前全断</p>  |
| 22  | <p><b>鯨山</b>(クジラヤマ) 陸中国上閉伊郡大槌町の北に現在する山往古の大海嘯に鯨山の麓に激浪の爲め打上げられたるより該山を鯨山と名稱せしといふ全部大槌町より下閉伊郡山田町へ越る峠を鯨峠と云ふ<br/>考ふるに弘仁貞觀の大海嘯なるやのこし鯨山古き唱へなり或人云ふ此山鯨の形に見るより云ふもあり然るに決して見えす海嘯の爲め鯨の打上られたるより名稱せし方信なるへし</p>                        | <p><b>鯨山</b>(クツラヤマ) 陸中国上閉伊郡大槌町ノ北ニ現在スル山往古ノ大海嘯ニ鯨山麓ニ激浪の爲メ打上ケラレタルヨリ該山鯨山ト名称セシト云全大槌町ヨリ下閉伊郡山田町越ル峠ヲ鯨峠ト云<br/>考ルニ弘仁貞觀ノ大海嘯ナルヤノ如シ鯨山古キ唱ヘナリアル人云此山鯨ノ形ニ見ルヨリ云トモアリ決シ見エス海嘯ノ鯨打上ラレタルヨリ名称セシ信ナルヘシ</p>                     |

表2 『岩手沿岸古地名考』の本文・注(続き)

| No. | 国会図書館本  | 遠野博物館本   |
|-----|---|--|
| 23  | <p>油コ淵(アフラッコフチ) 陸中國下閉伊郡舟越村字田の濱裏手に南東に當り寄濱と云ふあり山を以て境界せし所なり坂在り凹の地形往古海嘯に激浪越えて澤谷の内に油めと稱する魚多く打込みあるより油め淵と唱へしと云ふ當時人口夥多死亡すと云ふ故に魚族の名を以て名稱せしなり</p> <p>考ふるに貞觀十一年の大海嘯ならん慶長十六年海嘯記録を見るに明治廿九年の海嘯と此地方畧相似たり</p>                     | <p>油コ淵(アフラッコフツ) 陸中國下閉伊郡舟越村字田ノ濱裏手ニ南東ニ當リ寄濱ト云アリ山ヲ以テ境界セシ所ナリ坂アリ凹ノ地形往古海嘯ニ激浪越テ沢谷の内油メト魚多ク打込ミアルヨリ油メ淵ト唱ヘシト云當時人口多死亡ト云故魚族ノ名ヲ以テ名称セシナリ</p> <p>考ル貞觀十一年大海嘯ナラン慶長十六年海嘯記録ヲ見ルニ昨廿九年海嘯ト此地方ハ口全スルヤノ如シ</p>                        |
| 24  | <p>鯨石(クジライシ) 陸中國下閉伊郡重茂村に十二神山在り此山に鯨石と云ふ石あり之れは往古大海嘯に鯨打上げたる所故に大岩石在るを以て鯨石と名稱せしなりと云ふ</p> <p>考ふるに十二神山は本部重茂村中央の高山なり故に白鳳十二年或は弘仁十年貞觀十一年の大海嘯ならむ</p>   | <p>鯨石(クツライシ) 陸中國下閉伊郡重茂村ニ十二神山アリ此山ニ鯨石ト云石在リ之レハ往古大海嘯鯨打上タル所故ニ大岩石アルヲ以テ鯨石名称セシナリト云</p> <p>考ルニ十二神山ハ本部重茂村中央の高山故ニ白鳳十二年或弘仁十一年貞觀十一年大海嘯ナラヤ</p>   |
| 25  | <p>蛸畑(タコハタ) 陸中國下閉伊郡重茂村地名にゴボトツと云ふ所在り海苔松藻の着させし石あり往古津浪に蛸逆浪の爲め打上けられたる畑ならむ</p> <p>考ふるに明應七年の海嘯ならんか</p>  | <p>蛸畑(タコハタ) 陸中國下閉伊郡重茂村地名ニゴボトツト云所アリ海苔松藻ノ着着セシ石アリ往古津浪ニ蛸逆浪の爲め打上ラレタル畑ナラン</p> <p>考ルニ明應七年海嘯ナラヤノ如シ</p>   |
| 26  | <p>鯨取場(フグトリバ) 陸中國下閉伊郡重茂村往古の海嘯に鯨山逆浪に打上けられあるより鯨取場と唱へたりと云ふ</p> <p>考ふるに慶長の海嘯或は其后ならん本村字里より壹里余の山沢に在り</p>  | <p>ふく取場(フクトリバ) 陸中國下閉伊郡重茂村往古ノ海嘯ニふく沢山逆浪ニ打上ラレ在ルヨリふく取場ト唱ヘタルト云</p> <p>考ルニ慶長ノ海嘯ハ其后ナラン本村字里ヨリ壹里余ノ山沢ニアリ</p>   |
| 27  | <p>舟越タワ 陸中國下閉伊郡重茂村に月山と云ふ山あり往古大海嘯のとき此所船うち上られ越えたるより名稱せしと云ふ此地海面より高きこと四百尺以上なり</p> <p>考ふるに貞觀十一年の頃の大海嘯ならん本村字鴉磯に野崎滝太郎の旧記によると祖先の遺言に昔津浪に月山に避て家族の命を得たることあり故に三ヶ年目には月山に登る道筋を切拂置へしと遺言せり當時は明應ならん慶長の海嘯にも助命せしもの此月山に通かれ登りたりと云ふ</p> | <p>舟越タワ(フナコシタワ) 陸中國下閉伊郡重茂村ニ月山ト云山在リ往古大海嘯ノ時此所舟打上ラレ越ヘタルヨリ名称セシト云此地海面ヨリ四百尺以上ノ高キ所ナリ</p> <p>考ルニ貞觀十一年ノ頃大海嘯ナラン本村字鴉磯ニ野崎滝太郎ノ旧記ニヨルト祖先ノ遺言ニ昔津浪ニ月山ニ通ケテ家族命得タル事アリ故ニ三ヶ年口ハ月山登ル道切拂置ヘシト遺言セリ當時ハ明應ナラン慶長海嘯ニモ助命セシ此月山ニ通ケ登リタリト云</p> |
| 28  | <p>鎌長根(カマナカネ) 陸中國下閉伊郡津軽石村外山長根と云ふ山の内鎌長根と云ふ所あり昔大海嘯に此長根は激浪打上け鎌の峯口とに見えたるより名稱せしなりと云ふ</p> <p>考ふるに弘仁貞觀の大海嘯ならん</p>  | <p>鎌長根(カマナカネ) 陸中國下閉伊郡津軽石村外山長根ト云山ノ内鎌長根ト云所アリ昔大海嘯ニ此長根ハ激浪打上ケ鎌ノ峯口ニ見得ヘタルヨリ名称セシナリト云</p> <p>考ル弘仁貞觀ノ大海嘯ナラン</p>  |
| 29  | <p>ホッキ澤(ホッキサハ) 陸中國下閉伊郡宮古町黒森山にホッキ澤と云ふ地名在り之は往古海嘯の當時激浪にホッキ打上けられたるより名稱せしと云ふ</p> <p>考ふるに黒森山は海岸より数あり之れへホッキうち上ると云ふ往古弘仁貞觀の海嘯ならんと思考せり慶長の海嘯記事あり見るに昨年海嘯といふことあり此説に異同し</p>   | <p>ホッキ沢(ホッキサワ) 陸中國下閉伊郡宮古町黒森山ニホッキ沢ト云地名アリ之レハ往古海嘯ノ當時激浪ニホッキ打上ケラレタルヨリ名称セシト云</p> <p>考ルニ黒森山ハ海岸ヨリ数里アリ之レヘホッキ打上ルト云往古弘仁貞觀ノ海嘯ナラント思考セリ慶長ノ海嘯記事アリ見ルニ昨年海嘯ト口全ス</p>  |
| 30  | <p>鍛ヶ崎(クワカサキ) 陸中國下閉伊郡鍛ヶ崎町なり中興大鍛ヶ崎裏鍛ヶ崎崎鍛ヶ崎と数箇村に分區せしも近來鍛ヶ崎と元のここと名稱せしも往古鍛ヶ崎と唱へたる所分割せしなり此地名往古大海嘯に鍛の先激浪に打上けられ在るより其當時の名稱なるものゝことし</p> <p>考ふるに貞觀十一年の大海嘯なるへし</p>   | <p>鍛ヶ崎(クワカサキ) 陸中國下閉伊郡鍛ヶ崎町ナリ中興大鍛ヶ崎裏鍛ヶ崎崎鍛ヶ崎ト数箇村ニ分區セシモ近來鍛ヶ崎ト元ノ如ク名称セシモ往古鍛ヶ崎ト唱ヘタル所分割セシナリ此地名往古大海嘯ニ鍛ノ先激浪打揚ケラレ在ルヨリ當時名称セシモノ、如シ</p> <p>考ルニ貞觀十一年大海嘯ナルヘシ</p>   |
| 31  | <p>舟越(フナコシ) 陸中國下閉伊郡崎山村字箱石の内に小字八波(ヤソカ) 此近傍舟越といふあり海岸より壹里半所往古海嘯に舟越へうち上げたる所なり故に舟越と名稱せしと云ふ</p> <p>考ふるに八波山を越へ打上上げたるならん果して事實とせば慶長昨年の海嘯に比し増さる事数陪なり然れば貞觀前後の大海嘯なるへし</p>   | <p>舟越(フナコシ) 陸中國下閉伊郡崎山村字箱石ノ内ニ小字八波(ヤソカ) 此近傍ニ舟越ト云アリ海岸ヨリ壹里半ノ所往古海嘯ニ舟越ヘ打上タル所故舟越ト名称セシト云</p> <p>考ルニ八波山ヲ越ヘ打上タルナラン果セル口ハ慶長ヤ昨年ノ海嘯ニ増ル事数陪ナリ果セル口ハ貞觀前後ノ大海嘯ナルヘシ</p>   |
| 32  | <p>亭巻淵(ヤマキフチ) 陸中國下閉伊郡田老村々社の日枝神社の御坂登り三合目に坂切橋あり之れ往古海嘯に突切たりと云ふ其脇に沼在り之を亭巻淵といふ昔海嘯のとき婦人機織たる場合に海嘯来り婦人亭巻を背負ひ遁れたるに再び激浪来り爲めに此所に埋まりたるより名稱せしなりと云ふ</p> <p>考ふるに慶長十六年の海嘯ならん或は明應なるか</p>   | <p>亭巻淵(ヤマキフツ) 陸中國下閉伊郡田老村ノ村社日枝神社ノ御坂登リ三合目ニ坂切橋アリ之レ往古海嘯空切タリト云其脇ニ沼アリ之レヲ亭巻淵ト唱昔海嘯ノ時女機織タル場合ニ海嘯来リ女於巻ヲ背負通レタルニ再ハ激浪口来リ爲メニ此所ニ埋マリタルヨリ名称セシナリト云</p> <p>考ルニ慶長十六年海嘯ナラン或ハ明應ナルヤヤ</p>   |

表2 『岩手沿岸古地名考』の本文・注(続き)

| No. | 国会図書館本  | 遠野博物館本   |
|-----|---|--|
| 33  | 越田(コヘタ) 陸中国下閉伊郡田老村字乙部の内越田と云ふ地名あり昔海嘯に激浪越へたるより名稱せしならむ<br>考ふるに慶長十六年の海嘯なり   | 越田(コエタ) 陸中国下閉伊郡田老村字乙部ノ内越田ト云地名アリ昔海嘯ニ逆浪越へタルヨリ名稱セシナラン<br>考ルニ慶長十六年ノ海嘯ナリ  |
| 34  | 鉢盛(ハチモリ) 陸中国下閉伊郡小本村字茂師(祖師ナラン) 此近傍に鉢盛と云ふ名稱あり往古の海嘯に鉢の激浪に打上けられ在るより名稱したりといふ<br>考ふるに明應七年の海嘯ならん慶長の海嘯逆浪打上ける場所にあらず茂師海面より二百尺高き所なり本村字中野に杉の大木あり枝の八合目苧桶を竹にて造り掛置く如何となればむかし津浪の當時逆浪打上け杉の木枝に掛りたるより紀念に腐朽すれば更らに造りてかけ置なり | 鉢盛(ハツモリ) 陸中国下閉伊郡小本村字茂師(祖師ナラン) 此近傍ニ鉢盛ト云名稱アリ往古の海嘯ニ鉢口口逆浪ニ打上ケラレアルヨリ名稱セシナリト云<br>考ルニ明應七年ノ海嘯ナラン慶長ノ海嘯逆浪打上ル場所ニアラズ茂師海面ヨリ二百尺高キ所ナリ本村字中野ニ杉ノ大樹アリ枝八合目口桶ヲ竹ニテ造リ掛置ク如何トナレハ昔津浪ノ當時逆浪打上杉樹ノ枝掛リタルヨリ口紀年ニ腐朽チル更ニ造リカケ置ナリ |
| 35  | 鯉畑(カツハタ) 陸中国九戸郡野田村の内に中澤山に字鯉畑と云ふ所あり往古海嘯の際蹙打上けられたるより名稱せしといふ<br>海岸より廿丁餘山中なり<br>考ふるに明應七年の海嘯ならん慶長の海嘯と云ふもあれとも十月なる故如何や然れとも方今は十月に或る地方に鯉漁あるを見ければ慶長と云ふも可ならん   | 鯉畑(カツハタ) 陸中国九戸郡野田村ノ内ニ中沢山ニ字鯉畑ト云所アリ往古海嘯ノ際蹙打上ラレタルヨリ名稱セシト云海岸ヨリ廿丁余山中ナリ<br>考ルニ明應七年ノ海嘯ナラン慶長ノ海嘯ト云節アレトモ十月故如何や口口方今十月地方鯉漁アルヲ見ケハ慶長ト云モ那ラン   |
| 36  | 海鹿澤(イルカサハ) 陸中国九戸郡宇部村字久喜より北に當り此名稱あり昔海嘯に海鹿激浪にうち上られたるより名稱せしと云ふ<br>考ふるに慶長天和の海嘯ならん   | 海鹿沢(ゆるかさわ) 陸中国九戸郡宇部村字久喜ヨリ北ニ當リ此名稱アリ昔海嘯ニ海鹿激浪ニ打上ラレタルヨリ名稱セシト云<br>考ルニ慶長天和ノ海嘯ナラン   |
| 37  | 鍋倉(ナベクラ) 陸中国九戸郡中野村に熊野神社あり其脇に鍋倉と云ふ地名在りむかし海嘯のときに鍋逆浪に打上られたるより名稱せしといふ<br>考ふるに慶長十六年十月廿八日の海嘯なりといふ   | 鍋倉(ナベクラ) 陸中国九戸郡中野村ニ熊野神社在リ其脇ニ鍋倉ト云地名アリ昔海嘯時ニ鍋逆浪ニ打上ケラレタルヨリ名稱セシト云<br>考ルニ慶長十六年十月廿八日海嘯ナルト云  |
| 38  | フタ涉り(フタワタリ) 陸中国九戸郡中野村熊野神社の脇に鍋倉といふ地名あり其脇にフタ涉りと云ふあり之れに澤水の流れあり其澤の小川に昔海嘯の當時鍋蓋流れあるより名稱せしと云ふ<br>考ふるに前全断   | ふた涉り(フタワタリ) 陸中国九戸郡中野村熊野神社ノ脇ニ鍋倉ト云地名在リ其脇ふた涉リト云アリ之レニ沢小川アリ其沢小川ニ鍋ふた昔海嘯ノ當時流レアルヨリ名稱セシト云<br>考ル前全断  |
| 39  | 蛸澤(タコサハ) 陸中国九戸郡中野村字小子内に蛸澤といふ地名あり往古の海嘯に蛸打上られ在るより名稱せしならん<br>考ふるに慶長十六年十月廿八日海嘯のよし   | 蛸澤(タコサワ) 陸中国九戸郡中野村字小子内ニ蛸澤ト云地名アリ往古海嘯蛸打上ラレ在ルヨリ名稱セシナラン<br>考ルニ慶長十六年十月廿八日海嘯ノ由   |
| 40  | 布ヵ沢(メッカサハ) 陸中国九戸郡中野村字小子内蛸澤より水上に布澤と云ふ在り昔海嘯の當時昆布押あけあるより名稱せしといふ海岸より凡そ拾四丁餘の所なり<br>考ふるに慶長年間の海嘯なるか  | 布ヵ沢(メッカ沢) 陸中国九戸郡中野村字小子内蛸沢ヨリ水上ニ布沢ト云アリ昔海嘯ノ當時昆布押上ケアルヨリ名稱セシト云ト海岸ヨリ凡拾四丁余ノ所ナリ<br>考ルニ慶長ト云   |

注1) 原本通りの表記で翻刻した。したがって、新旧両方の字体が混じっていたり、平仮名と片仮名が混じっていたりするものも原文ママである。「牛轉」(国会図書館本) 6行目の「謹々」、「舟越」(国会図書館本) 4行目の「打上上げた」、「ホッキ澤」(国会図書館本) 4行目の「数あり」は、それぞれ「僅々」、「打上けたる」、「数里あり」の誤記の可能性が高いが、原文ママとした。□は判読不明文字を表わす。

注2) 遠野博物館本は、朱色による校正前の文章を翻刻した(ただし、見出しの地名は除く)。このため、翻刻文中に誤記と思われる箇所が散見される。

注3) 地名右の括弧内は地名の読みを表わす。国会図書館本と遠野博物館本とは読みが違うものがある。原典では、「淡波」と国会図書館本の「舟越タワ」の読みは記されていない。「鍋在り」、「駒込メ」、「集り」には送り仮名の「リ」や「メ」にも読みが振られている。「海鹿沢」(遠野博物館本)の読みのみ平仮名で表記されている。遠野博物館本では、「布ヵ沢」の「沢」の読みが漢字で表記されている。

注4) 各項目の中で一字下げで記載している文章は、地名の由来がいつの津波によるものかを山奈が推察し、注記として記した箇所である。「白澤」の注記は、遠野博物館本にはみられるが、国会図書館本には書き漏らされたのか見当らない。

を「なるか」に変えて伝聞から推量に変えたりするなど、得られた情報が聞き取りによるものなのか、自身の推察によるものなのかを慎重に区別していたと考えられる。

このように、山奈は国会図書館本の作成にあたって事実関係を慎重に確認したり、語句

や文章の表現について推敲を重ねたりするなど、完成度を高めるための努力を払っていたといえよう。この行為は、日本各地の読者に正確な情報をもたらすという意味において重要なものとなった。また、その一方で、当時の岩手県の人々にとって、遠野博物館本の記



表3 『岩手沿岸古地名考』の序文の比較

| 国会図書館本  | 遠野博物館本  |
|---|---|
| <p>我國古代より震災及海嘯の災害少なしとせず而して昨明治廿九年六月十五日午後八時三陸の大海嘯は千古未曾有の災害い<u>は</u>さるを得す其惨状の極實に筆紙の及はさる所なり故に該調査の必要を認め不肖宗真有志に謀り賛成を得て本縣に陳情し採用する所となり巖手縣沿岸巡回を命せられ其災害の實況を視察したり當時里人老夫に問ひ口か口碑に傳はる事のみを集め本書を編纂せり事實或は確然せさる所ありと雖とも往古大海嘯の當時海濱の部落全体流亡せしこと一にして足らず流亡の後視察者其地名の問ふへき由なく其地にある流品を以て杜撰の地名を附したるは當然の事實なるか如し故に余公務の餘業として耳朶にせしものを筆記し後世學者の参考に供す</p> <p>明治三十年八月<br/>山奈宗真</p> | <p>我國古代より震災及海嘯の口災不少昨明治廿九年六月十五日午後八時三陸大海嘯千古未曾有ノ災害ト云サルヲ得ス其慘狀極ト云ヘシ故不肖有志ニ謀リ賛成ヲ得テ本縣ニ陳情採用スル所トナリ岩手県沿岸巡回ノ當時里人老夫ニ問フカ口碑ニ傳ル事ノミ集メ編纂セシモノナリ事實確然トセスト雖モ往古大海嘯ノ當時海濱ノ一部落流亡セシ事不少流亡ノ後視察者其地ニ在ル物色ヲ以テ名称ヲ付シタルハ當然事實ナリ故ニ余巡回ノ口テ耳朶ニセシモノナラン將來學者ノ參考ニ供セン為記スルモノナリ</p> <p>明治三十年八月<br/>山奈宗真</p> |

注) ゴシック体は遠野博物館本で朱書きによる校正が行われて国会図書館本にも反映された箇所、波線は校正によらず加筆された箇所を表す。  
また、口は判読不明文字を表す。

載内容の方がより身近で分かりやすい情報であった可能性がある。

### Ⅲ. 『岩手沿岸古地名考』の内容

#### (1) 序文

『岩手沿岸古地名考』は、本書編纂の動機が書かれている序文と、40件の津波地名についてそれぞれの所在地や由来の内容、由来に関する注記が記述されている本文から成る。また、国会図書館本には中表紙と、中表紙と序文との間の遊び紙部分に山奈の署名が認められる。一方の遠野博物館本には、中表紙がなく、序文の前の遊び紙部分に2行分の覚書とみられる表記があるだけである。

まず、国会図書館本の序文の前に記されている署名部分について確認しておきたい。署名には「明治三十六年十二月」の日付と、本書が1897(明治30)年第2回水産博覧会に出品されたものであることが添えられている。署名の日付にある1903(明治36)年は、山奈が一連の資料群を帝国図書館に寄贈した年であることから<sup>27)</sup>、署名は寄贈の際に記入したものであると考えられる。なお、上述の署名部分は遠野博物館本にはなく、その代わりに「此書口書は帝国図書館に献納せり」(口は判読不明文字)という記載が認められる。これは、国会図書館本を帝国図書館に寄贈した旨

を覚書として記載したものではないかと思われる。一方で、山奈は序文の末尾に「明治三十年八月」と記していることから、序文や本文は津波後1年程度の間に執筆されたものと考えられる。

次に、序文の記載内容を整理すると、「調査立案の契機」、「現地調査で得られた情報」、「津波地名の成立に関する考察」、「『岩手沿岸古地名考』編纂の動機」の4点にまとめられる(表3)。以下にその概要を述べる。第一点目として、1896(明治29)年明治三陸地震津波の惨状に直面し、山奈が三陸調査を立案した経緯を説明している点である。「其惨状の極実に筆紙の及はさる所なり」という記述からは、山奈が得も言われぬ被害の大きさに衝撃を受けている様子が窺える。そして、「当時里人老夫に問ひ口か口碑に伝はる事のみを集め本書を編纂せり」と、現地の住民の言い伝えのみを収集して本書を編纂したことを述べている点を第二点目として指摘しておきたい。

第三点目としては、「事実或は確然せさる所ありと雖とも」と、本書掲載の津波地名の由来伝承を事実かどうか疑いつつも、これらの成立過程について想定していることである。序文の記述には「往古大海嘯の当時海濱の部落全体流亡せしこと一にして足らず流亡



の後視察者其地名の間ふへき由なく其地にある流品を以て杜撰の地名を附したるは当然の事実なるか如し」とあることから、津波によって集落の全住民が流されてしまったために、被災後、視察者が地名の把握に難儀し、流された物品をもとにして簡便な（本書では「杜撰な」）地名を付けたのも当然であろうと、津波地名の具体的な成立過程を想定した内容が読み取れる。最後に第四点目として、「故に余公務の余業として耳朶にせしものを筆記し後世学者の参考に供す」と、後世の学者の参考に資するよう、津波地名について聞き取った内容を書き留めておいたという本書編纂の動機を記述している点に留意したい。

序文の文面について遠野博物館本と国会図書館本とを見比べてみると、文意は変わっていないが、後者において多くの言葉が付け足されて文章表現が豊かになっており、後世の人々に読まれることを意識して本書編纂の経緯を言葉を尽くして伝えようとしたことが窺える。この点を踏まえると、本書の帝国図書館への寄贈はそうすることで後世の人々の目に触れる機会が増えると山奈が見込んだためではないかと思われる。

## (2) 津波地名の分布、空間スケール、由来

ここでは山奈によって書き残された40件の津波地名について、これらの分布、空間スケール、由来についてみていきたい。まず、津波地名が所在する旧町村の分布図から津波地名の分布を確認すると、宮古町以北の津波地名数は11件、それよりも南は29件で、岩手県の南部に比較的多いことが分かる（図1）。また、一つの旧町村に複数の津波地名が所在する場合もあり、その内訳は、気仙郡広田村や上閉伊郡大槌町、下閉伊郡重茂村、九戸郡中野村の4件が最も多く、次いで、気仙郡越喜来村の3件、気仙郡気仙村、日頃市村、唐丹村（1件は吉浜村との境の峠）、上閉伊郡<sup>うのすまい</sup>鶴住居村（現、岩手県釜石市）、下閉伊郡田

老村の各2件と続く（表4）。そして、本吉郡小原木村、気仙郡小友村、末崎村、下閉伊郡船越村、津軽石村、宮古町、鉾ヶ崎町、崎山村、小本村、九戸郡野田村、宇部村が各1件という内訳であった。広田村や大槌町、重茂村、中野村が4件で多く、逆に沿岸部でも綾里村（現、岩手県大船渡市）や、釜石町（現、岩手県釜石市）、普代村（現、岩手県普代村）など1件も掲載されていない村もみられる。このような分布の特徴には、集落数や地形など様々な要因が考えられるが、津波地名の位置を旧町村よりも詳細なレベルで把握する必要があるため、検討は別稿に譲りたい。

次に、津波地名が表す空間スケールの規模は、大字とそれよりも小さいスケールのものとに大別できる。大字に属する地名は「鉾ヶ崎」と「槌」（大槌町の「大槌」・「小槌」）で、残りの38件は大字よりも小さいスケールの地名（山の名称も含む）である。ただし、「鯨石」は地名としてではなく、石の名称として紹介されている。続いて、それらの地名に用いられている漢字が表す場所の特徴に注目してみたい。漢字によって場所の地理的特徴が推測できる地名のうち、「沢」のつくものが6件と最も多く、次いで「淵」、「田」、「崎」、「畑」、「長根」、「倉」、「場」の2件、「野」、「台」、「山」の1件となっている。したがって、これらの津波地名は、「台」や「山」、「長根」、「倉」などの「山・峠」系のものと、「沢」や「淵」などの「谷」系に属するものとに分けられる。このほかには、「舟」という漢字を使用している津波地名（「舟野」、「舟越タワ」、「舟越」など9件）と、「越」という字を持つもの（「舟越タワ」、「舟越」、「越田」の3件）が目立つ。

最後に、津波地名と津波の作用との関係性について検討したい。筆者の分析によれば、何らかの物体が津波によって打ち上げられたり、流れ着いたりした結果、その物体の名称をもって場所を呼びならわすようになったと

表 4 津波地名の分布

| 郡名            | 旧町村名 | 現在の市町村名 | 件数 | 備考        |
|---------------|------|---------|----|-----------|
| 九戸郡<br>(岩手県)  | 中野村  | 洋野町     | 4  |           |
|               | 宇部村  | 久慈市     | 1  |           |
|               | 野田村  | 野田村     | 1  |           |
| 下閉伊郡<br>(岩手県) | 小本村  | 岩泉町     | 1  |           |
|               | 田老村  | 宮古市     | 2  |           |
|               | 崎山村  |         | 1  |           |
|               | 鉾ヶ崎町 |         | 1  |           |
|               | 宮古町  |         | 1  |           |
|               | 津軽石村 |         | 1  |           |
|               | 重茂村  |         | 4  |           |
|               | 船越村  | 山田町     | 1  |           |
| 上閉伊郡<br>(岩手県) | 大槌町  | 大槌町     | 4  |           |
|               | 鵜住居村 | 釜石市     | 2  |           |
| 気仙郡<br>(岩手県)  | 唐丹村  | 釜石市     | 2  | 1件は吉浜村との境 |
|               | 越喜来村 | 大船渡市    | 3  |           |
|               | 盛町   |         | 1  |           |
|               | 日頃市村 |         | 1  | 日頃市村との境   |
|               | 末崎村  |         | 1  |           |
|               | 広田村  | 陸前高田市   | 4  |           |
|               | 小友村  |         | 1  |           |
|               | 気仙村  |         | 2  |           |
| 本吉郡<br>(宮城県)  | 小原木村 | 気仙沼市    | 1  |           |

出典：『岩手沿岸古地名考』をもとに作成。

いう種類の話が40件中36件と圧倒的な数を占めている。これとは異なる種類の話は、津波の際の激浪により牛が転び落ちてしまったところ（「牛転」）、津波が越えたところ（「越田」）、集落の集まりに参加していた住民が助かるという逸話に由来するところ（「集り」）、芋巻を背負う婦人が津波に遭うという昔話に由来するところ（「芋巻溺」）を確認できるのみである。

具体的に、津波によって打ち上がった物体をみると、クジラ、タコ、カラカイ（エイの一種の「カラゲイ」）、アイナメ（本書では「油め」）、ホヤ、イルカ、サメ、フグ、カツオ、ホッキなどの魚介類、昆布のような海藻、牛や馬などの家畜、または、鍋、戸、

鉦、鎌、臼、舟、槌、鍋蓋、鉢などの生活・生業のための道具類に分けられる。これらのことから、山奈が収集した地名の多くは、魚介類、海藻、道具類が山や峠の上、あるいは谷沿いに打ち上げられることで名付けられた小地域レベルの地名であるといえる。

### （3）山奈による津波地名の成立に関する考証

山奈は『岩手沿岸古地名考』の中で、各津波地名が地元の言説の中でどのように語られ、また、その由来となった津波がいつのものかについて推察し、注記を付して説明をしている。そこで挙げられた津波は、白鳳12年（西暦不明）、749～757（天平勝宝）年間、820（弘仁11）年<sup>28）</sup>、869（貞観11）年<sup>29）</sup>、1185年 8

月（文治元年7月）、1498（明応7）年<sup>30）</sup>、1611年12月2日（慶長16年10月28日）、1628年2月11日（寛永5年1月7日）、天和年間（1681～1683）に発生した地震によるものである。山奈は1つの津波地名の由来となった津波について複数の候補を挙げている場合もあるが、各津波の延べ登場回数は貞観15回、慶長14回、明応12回、弘仁6回で、白鳳（「鯨石」）、天平勝宝（「鋤台」）、文治（「鮫田」）、寛永（「駒込メ」）、天和（「海鹿沢」）は1回ずつである（表5）。以上から、三陸沿岸に比較的大きな津波災害をもたらしたと考えられている、平安時代の貞観地震や江戸時代の慶長地震の時の津波を念頭に置く傾向にあったことが分かる。ただし、ここで挙げられた津波の中において、三陸沿岸に被害を与えていないことが判明している明応や弘仁の津波も含まれている点に留意すべきである（表5）。次に、山奈による推察の根拠について説明したい。たとえば、山奈は「集り」（表2、No.6）や「岩鞍」（同、No.7）の由来について、慶長の検地帳にこれらの字名が記載されている事実を指摘し、地名の成立はそれ以前と推定して明応の津波と関連付けている。ま

た、「牛転」（表2、No.16）のように、その地名の所在地である荒川浜（現在の釜石市唐丹町を流れる熊野川の河口付近）の被災記録をふまえ、津波地名成立の由来を慶長の津波に求めている。さらに、慶長地震津波を明治三陸地震津波と同程度の遡上高と見なしている節が見受けられ（表2、No.23「油口渕」）、これを基準に明治の津波よりも標高の高い地点を示す津波地名であれば貞観や明応の地震津波と関連付けて由来を解釈しているようにも思える（表2、No.31「舟越」）。山奈自身も嘆いているが、平安時代や室町時代の津波はともかく、江戸時代の津波ですら記録に乏しいという状況にあった。そのため、いずれの由来も決定的な根拠を示すことが困難であったと考えられることから、山奈の大胆な推察が目立つ内容となっていることは否めない。II章（1）節で検討したように、山奈は1896（明治29）年以前の歴史津波の情報収集も当初から調査項目の1つとして挙げており、その結果を『岩手県沿岸大海嘯取調書 甲乙丙丁』の中で報告している。そこで収集された歴史津波は、過去の津波災害の中でも比較的

表5 山奈が津波地名の由来として推察した歴史津波

| 延べ登場回数 | 山奈の記述にみられる地震発生年月日       | 地震名                        | 概要                       |
|--------|-------------------------|----------------------------|--------------------------|
| 1      | 白鳳12年（西暦不明）             | 684（天武13）年の地震か             | 東海～東南海の巨大地震で三陸地方津波なし     |
| 1      | 749～757（天平勝宝）年間         | 745（天平17）年の地震か             | 中部地方の地震で三陸地方津波なし         |
| 6      | 821（弘仁11）年              | 818（弘仁9）年の弘仁地震か            | 関東の地震で三陸地方津波なし           |
| 15     | 869（貞観11）年              | 貞観地震                       | 三陸地方津波あり                 |
| 1      | 1185年8月（文治元7月）          | 文治地震                       | 畿内の地震で三陸地方津波なし           |
| 12     | 1498（明応7）年              | 明応地震か                      | 東海～東南海の地震津波で三陸地方津波なし     |
| 14     | 1611年12月2日（慶長16年10月28日） | 慶長三陸地震津波                   | 三陸地方津波あり                 |
| 1      | 1628年2月11日（寛永5年1月7日）    | 1793年2月11日（寛政5年1月7日）の寛政地震か | 寛永は寛政の誤記か。寛政であれば三陸地方津波あり |
| 1      | 1681～1683（天和）年間         | 1683（天和3）年の日光の地震か          | 三陸地方津波なし                 |

出典：延べ登場回数は『岩手沿岸古地名考』をもとに作成した。地震名や概要の確認には以下の文献を参照した。萩原尊禮監修『地震の事典 第2版』三省堂、1989、国立天文台編『理科年表 平成23年』丸善、2010、宇佐美龍夫・石井 寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子『日本被害地震総覧599-2012』東京大学出版会、2013。

資料が残存している慶長の地震津波のほか、当時の聞き取りによっても被災の経験や伝承を確認できた江戸時代後期の歴史津波に関する情報が多い。これに対して、山奈が『岩手沿岸古地名考』で推察した津波は、聞き取りや古文書でも示されることが少なくなる、より古い時代の津波が比定される傾向にある。このことから、真偽のほどは不明としつつも、山奈は津波地名に、文献などでは把握しにくい、より古い時代の津波の教訓を託そうとしたのかもしれない。

#### IV. おわりに

本稿では、1896（明治29）年の明治三陸地震津波発生直後に三陸沿岸の被災地を調査した山奈宗真によって著された津波地名集『岩手沿岸古地名考』に着目し、遠野博物館本と国会図書館本の翻刻、および両者の比較検討を通して本書の内容分析を行った。『岩手沿岸古地名考』は津波地名に特化したテーマ性の強い資料である。これは、山奈のほかの資料、すなわち被災範囲や被害数値を図や表で示して被害実態を浮きぼりにした資料や、復興の手掛かりとすべく収集した集落・生業に関わる基礎的な情報を綴った資料とは明らかに性質が異なる。以下、分析結果を踏まえ、本書の資料的価値を整理する。

まず、遠野博物館本と国会図書館本との比較から、国会図書館本の編集過程では事実関係の確認や推敲が重ねられ、後世の人々に読まれることを意識して言葉を尽くそうとした山奈の努力の跡が認められた。一方で、国会図書館本の作成の際、地名の読みを標準語に改めたと考えられる点からは、当時の岩手県の人々にとってはむしろ、遠野博物館本記載の内容の方が、より身近で分かりやすいものとなっていたのではないかと推察される。起業家であった山奈にとって、明治三陸地震津波の被災地調査はそれ自体が被災情報の収集機会として大きな重要性を持っていたことは

間違いないが、被災情報とは異質な津波地名を一冊の書物にまとめ、帝国図書館に寄贈するという労を考えると、津波地名の記録と継承に対する山奈の思いは計りしれない。序文をはじめ、本書を見渡しても具体的な本書の活用方法は記されていないが、その行間からは、被災経験の伝承媒体として津波地名を残そうとした山奈の意図も見え隠れする。

次に、津波地名の所在する旧町村の分布図から、津波地名は岩手県南部に比較的多いことが読み取れた。また、内容分析から山奈が書き残した津波地名は、山や峠、谷沿いに魚介類や海藻、道具類が打ち上げられることで名付けられた小地域レベルの地名が多いことが分かった。平川らによる分類に当てはめるならば、本書に掲載された40件の津波地名はすべて「津波来襲に関するエピソードに由来する地名」に類別される<sup>31)</sup>。この類型に属する津波地名として、平川らは一般向けの書籍から21件を抽出したが、これらはすべて現存するものである<sup>32)</sup>。これに対して、本書は明治三陸地震津波発生当時の人々が認識していた津波地名が書き留められている点に特徴がある。

このように本書には、三陸沿岸住民によって認識されていた過去の津波地名が記録されており、住民と津波災害との関係を探る学術的に極めて重要な資料であるといえる。北原は本書を山奈の関心事の幅の広がりを示す資料としているが<sup>33)</sup>、それだけにとどまらず、本書には津波常襲地域の災害文化の一端が記録された歴史資料としての価値が認められる。ただし、山奈が書き留めた津波地名の由来については、山奈が大胆な推察を試みていることから、山奈による調査当時、すでに曖昧な内容で伝承されていた点に留意する必要がある。また、国会図書館本にも誤記と思われる箇所がいくつかみられることから、今後、両者の差異をより詳細に比較検討する必要もあろう。

山奈によって書き残された地名は果たして現在どの程度継承されているのであろうか。最後に、本書を素材として地名の継承と断絶という観点から、広く一般的に津波常襲地域における災害文化のあり方を検討することを今後の課題として指摘しておきたい。

(\*立命館大学, \*\*北海学園大学,  
\*\*\*徳島大学, \*\*\*\*東北大学)

#### 〔付記〕

本稿の作成にあたり、阿部信代氏をはじめとする遠野市立博物館の皆様、立命館大学文学部卒業生の小田美鈴さんにお世話になりました。また、本研究は公益財団法人国土地理協会平成27年度学術研究助成（研究代表者：村中亮夫）を受けて実施されました。記して感謝申し上げます。本稿の内容の一部は、2016年日本地理学会秋季学術大会（於東北大学）にて発表しました。

#### 〔注〕

- 1) 「災害地名」は場所の災害履歴を示す地名と定義されており、「津波地名」は「災害地名」の中で、とくに津波災害に関するものである。中根洋治『愛知の地名―海進・災害地名から金属地名まで―』風媒社、2012。
- 2) 田面木貞夫編著『遠野の生んだ先覚者山奈宗真』遠野市教育文化振興財団、1986。
- 3) 7点の資料は、現在では、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されており、インターネットを通して閲覧することができる。<http://dl.ndl.go.jp/>（閲覧日 2017年3月23日）。
- 4) ①菊池万雄「山奈宗真の明治三陸津波調査記録」地震ジャーナル23, 1997, 32-43頁、  
②北原糸子「明治三陸津波と山奈宗真」『津波災害と近代日本』吉川弘文館、2014, 48-98頁。
- 5) 前掲4) ②95頁。
- 6) 前掲4) ②70-71頁。
- 7) 武者金吉「鯨居士雑筆」地震（第2輯）12, 1940, 126-131頁。
- 8) 首藤伸夫「山奈宗真「明治29年三陸大津波調査報告」翻刻の経緯」津波工学研究報告5, 1988, 57-59頁。
- 9) 山下文男『哀史三陸大津波』青磁社、1982。
- 10) 卯花政孝・太田敬夫解説「三陸沿岸大海嘯被害調査記録―山奈宗真―」津波工学研究報告51, 1988, 60-379頁。
- 11) 三陸町史編集委員会編『三陸町史 第4巻 津波編』三陸町、1989。
- 12) 菊池万雄「明治29年三陸地震津波」『日本の歴史災害―明治編―』古今書院、1986, 173-265頁、前掲4) ①。
- 13) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会編『1896明治三陸地震津波報告書』内閣府、2015。
- 14) 大船渡市立博物館編『津波をみた男―100年後へのメッセージ』大船渡市立博物館、1997。
- 15) 北原糸子・白土 豊・卯花政孝「山奈宗真「三陸大海嘯岩手県沿岸見聞誌一斑」他の資料的性格について」号外海洋15, 1998, 220-225頁、前掲4) ②48-98頁。
- 16) 蝦名裕一・今井健太郎「史料や伝承に基づく1611年慶長奥州地震の津波痕跡調査」津波工学研究報告31, 2014, 139-148頁、蝦名裕一・今井健太郎・首藤伸夫「山奈宗真『岩手県沿岸大海嘯取調書』に記される近代以前の歴史津波痕跡について」歴史地震30, 2015, 196頁。
- 17) 前掲4) ②70頁。
- 18) たとえば植田は、津波の被災経験を伝える媒体として、津波碑・津波記念館、屋号、家屋に記された津波到達線の3つを挙げた。植田今日子「災害の伝承媒体としての村落」年報 村落社会研究51, 2014, 263-304頁。
- 19) 平川雄太・佐藤翔輔・鹿島七洋・今村文彦「津波由来地名の整理・分類と空間分布に関する考察―東日本大震災の被災地を対象にして―」災害情報14, 2016, 128-139頁。
- 20) 蝦名裕一「慶長奥州地震津波の歴史学的分析」宮城考古学15, 2013, 27-43頁、蝦名裕一「東北地方太平洋沿岸における歴史津波の史料と伝承の分析―1611年慶長奥州地震津波に関する新出史料を中心に―」津波工学研究報告32, 2015, 231-239頁。

- 21) 「日誌」は前掲2)で翻刻されている。
- 22) 『岩手県海岸巡回古文書拾集録』は、山奈が調査時に古文書を書写したものを中心に集成した記録である。前川さおり「山奈宗真の津波被害調査資料を読む」遠野学1, 2012, 173-184頁。
- 23) 前掲4) ②56-60頁。
- 24) 前掲4) ②56-60頁。
- 25) 前掲4) ②64-68頁。
- 26) ここで、「修正」とは遠野博物館本で校正の指示を行って、国会図書館本でその通りに変更したケースを、また、「変更」とは遠野博物館本で指示がないのに国会図書館本において文章を変更した場合をいう。
- 27) 前掲4) ②51-52頁。
- 28) 国会図書館本の「鯨石」の項目において「弘仁十年」と年代が記載されているが、遠野博物館本では「弘仁十一年」と書かれていることから、国会図書館本の作成にあたって「十一」の「一」の部分が書き漏らされたと考えられる。
- 29) 前掲28)と同様の理由で、国会図書館本の「鯨ヶ渚」の「貞観十年」は「貞観十一年」の誤記と考えられる。
- 30) 国会図書館本および遠野博物館本の「集り」にみられる「明和」は400年前とあるので、「明応」の誤りと考えられる。同様に、両本の「舟荒」にある「明和」も「明応」の誤記と思われる。
- 31) 前掲19)。平川らの研究では、津波地名が「津波来襲に関するエピソードに由来する地名」と「津波痕跡を示す音に由来する地名」とに大別されている。前者はさらに、「モノが流れてきたことに由来する地名」や「津波の挙動に由来する地名」、「念仏を唱えたことに由来する地名」、「その他エピソードに由来する地名」に分けられている。
- 32) 前掲19)。21件のうちほとんどが宮城県内の地名であり、岩手県内のは「船越」(岩手県山田町)が挙げられたに過ぎない。なお、この地名は『岩手沿岸古地名考』には掲載されていない。
- 33) 前掲4) ②70-71頁。